

第 19 回

「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」

実 施 報 告 書



<列左より>菊川実行委員長、岩崎 由美さん、原本 佳歩さん、牧野 百合絵さん、村松亜美さん
本橋 恵美さん、北原審査委員長

【開催日】 2018年10月20日(土) 面接 12:00～ 表彰式 13:10～

【会場】 東京ガーデンパレス 3階 鶴の間

【主催】 一般財団法人 共立国際交流奨学財団

【後援】 文部科学省

外務省

産経新聞社

【協賛】 株式会社 共立メンテナンス

<総評>

「日本人学生がアジアについて考え、実際にアジア各国を訪問し体験することでアジアに対する理解を深め、留学・就業等をするきっかけにしてもらいたい」という目的で 2001 年より開催している「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」は、今年で第 19 回目を迎えました。

今年度より内容を一新し、①日本語教育体験 ②就業体験のどちらかを体験するインターンシップの募集をしました。対象国は①カンボジア②マレーシア③ミャンマーの 3 カ国で、カンボジアが 3 名、マレーシアが 2 名の応募がありました。問い合わせは多数いただいたものの、残念ながらミャンマーでのインターンシップ応募はありませんでした。

10 月 20 日（土）東京ガーデンパレスにおいて、第 19 回「日本人学生の『アジア体験』コンテスト」を開催いたしました。

応募者は、中部地方や関西地方、海外（マレーシア）と、遠方から参加して下さいました。

書類選考による一次審査では 5 名が通過し、二次審査では第 1 グループをカンボジア、第 2 グループをマレーシアとし、国ごとに面接を行いました。

将来に繋がる熱い思いを持った参加者が多く、遠方より参加して下さいった点からも、皆さんの志の強さを感じました。

そして審査委員 2 名による審査の結果、5 名全員が入賞し、実行委員長より賞状と、体験費用として賞金 30 万円を授与されました。

入賞者 5 名には 2019 年 3 月末までに、それぞれが交渉した受け入れ先でインターンシップを体験し、その報告書を提出してもらいます。

このアジア体験コンテストを通して、東南アジアにおける日本語教育・事業や企業の現状や課題を理解し、日本と東南アジア各国を繋ぐ架け橋として活躍することを期待しております。そして将来、日本と東南アジア各国の発展に貢献する人材となることを願っております。

<実施報告>



会場外観



会場の様子



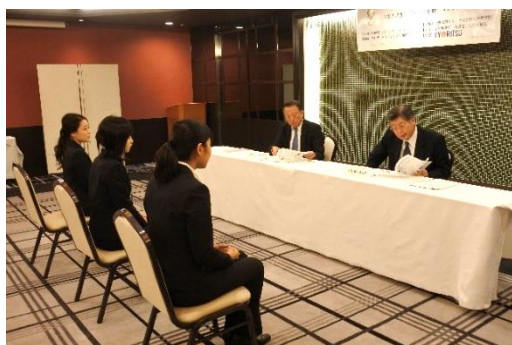
受付の様子



待ち時間の様子

◇面接 11:50～

第1グループ（カンボジア）3名



第2グループ（マレーシア）2名



◇表彰式 13:10～

＜式次第＞

- 一、開会の辞
- 一、実行委員長 挨拶
- 一、審査委員長 講評
- 一、賞状授与
- 一、閉会の辞

＜実行委員長 挨拶＞



菊川実行委員長

＜審査委員長 講評＞



北原審査委員長

＜賞状授与＞



入賞者5名に菊川実行委員長より
賞状と賞金が授与されました。

◇入賞者 説明会 13:40～



入賞者へ企画の実施説明の様子

入賞賞品 『夢・日本体験賞』受賞者一覧



体験先 (体験国)	氏名	学校名	体験内容
NPO 光語学スクール (カンボジア)	はらもと かほ 原本 佳歩	京都外国語大学	書道を通しての日本語教育 (日本語教育体験)
NPO 光語学スクール (カンボジア)	まさの ゆりえ 牧野 百合絵	武庫川女子大学	世界で活躍できる医療人 ～日本語を通じて子供達を健康に～ (就業体験)
カンボジア ティータイム (カンボジア)	むらまつ あみ 村松 亜美	名古屋大学	「日本の文化× 継続的な仕組みづくり」で カンボジア観光業を支える (就業体験)
AtoZ ランゲージセンター (マレーシア)	いわさき ゆみ 岩崎 由美	ホツマインター ナショナルスク ール	「シャドーイング」を活用して、より自然 な日本語の音声を身につける機会を与える (日本語教育体験)
AZIA MARKETING MALAYSIA SDN.BHD (マレーシア)	もとはし えみ 本橋 恵美	モナッシュ大学	マレーシアでのインターンシップを通じて 得たいこと (就業体験)



< 講評 >

審査委員長 北原 賢三

一般財団法人 共立国際交流奨学財団 評議員・奨学金選考委員
神田外語大学 客員教授 兼 キャリア教育センター長

今回は全体で 5 名の応募者があった。そのうち、カンボジアで体験したい応募者が 3 名いた。

日本語教育体験を志望した 1 名の応募者は、書道が得意であるということで、書道を日本文化の一つとして教えながら日本語教育をしていきたい希望であった。残りの 2 名は就業体験を希望していた。そのうちの 1 名は、薬学を専攻していて、カンボジアの子供達のエデュケーション、健康、衛生状態などを調べて、何らかの手助けをしたいという希望であった。彼女は、『日本で不衛生という状態を経験したことがない』との返答で、日本の衛生状態の高さを改めて思った。他の一人は、経営学を専攻していて、カンボジアで現地のモノを利用して安定的に継続的に売れるビジネスモデルを構築し、現地の貧困化対策に寄与したいという。カンボジアを希望する 3 名に共通する特徴は、各自の専門性を活かして現地に貢献できる方法を模索してきたいということである。また、アジアを訪れるのも今回が初めてではないという応募者も 2 名いたのもアジア体験への熱意を感じられた。

他方、マレーシアでの体験を希望している 2 名のうち、1 名は主婦業の傍ら、日本語教師の資格を努力して取り、現地で「シャドーイング」という語学の学習方法を活かして日本語教育をしたいという情熱を持っていた。他の応募者は、経営学をマレーシアの大学で専攻していて、学んでいる SNS マーケティングを実践して、現地で就業体験をしたいと述べていた。

今回、応募者 5 名全員が女性であり、海外志向の高さとともに頼もしさを感じた。外国で就業体験にしろ、日本語教育体験にしろ、各自の専門性を活かして何らかの貢献をしたいという熱意を感じられた。また、全員が自分の主張をしっかりと述べていて、体験の成果がたいへん期待できそうであった。初めて現地を訪れる応募者もいるので、健康に十分に留意して初期の目的を達成してほしい。